

都道府県 番号 28	学校名 兵庫県立西宮香風高等学校	課程 定時制	学科 単位制普通科	指定期間 H26～H28
---------------	---------------------	-----------	--------------	-----------------

平成26年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

多部制単位制高等学校に通う、多種多様な障害があるため不登校に至るなど複合的な困難さを有する対象生徒に対して、ユニバーサルデザイン(UD)を用いた授業や障害に応じた特別な指導・支援に係る授業をピックアップ授業として展開する。また、関係者に対して質問紙法などを用いて実践評価を行う。全校に関わる教育課程と個々の生徒に応じた教育実践の総合的開発を課題とする。

2 研究の概要

本校は3部制多部制単位制の定時制普通科高校である。学習障害、注意欠陥/多動性障害、自閉症スペクトラム等の発達障害、情緒障害、知的障害等の多様な困難さを抱えた生徒が多く通う高校である。

本校は単位制の特色をいかして受講は完全自由選択制をとっている。このため所属するクラスは設定するもののホームルームや総合的な学習の時間以外は選択の授業となる。個々の学習上、生活上の困難さを的確に把握し共有に努めているが、それぞれの授業での学びの質がどれだけ保障されているか、また、個々の特性に沿った様々な支援により個性の伸長や社会的な自立に対応できているのかという課題も存在する。本校は柔軟な教育課程の編成をしてきたが、個の学びという側面からの改善・工夫は十分とはいえない。これらの課題に対して研究実践し、評価を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究開始時の状況と研究の目的

「2 研究の概要」に述べたように現状は各部、担任、教科担当の個別の対応により、生徒を指導しているため、年度替りの引継ぎなどに課題がある。そのため、学校全体の課題として以下の5点を目的に本校の財産となるような研究となることを目標とする。

- 目的
- ①生徒の実態を把握するための方法の検討
 - ②研究対象生徒に係る学びの質の保障と向上の実現
 - ③様々な支援による個性の伸長と社会的自立の実現
 - ④教育課程の編成の工夫と改善
 - ⑤高等学校における特別支援教育推進のための課題

(2) 研究仮説

下記に記すメソッド①～④をPDCAサイクルに基づいて実践開発研究することで本校、ひいては高等学校における特別支援教育が円滑に実施できる。

メソッド① 特別支援教育対象者の把握と本人・保護者の理解

研究対象生徒の障害は一見して見過ごされるものや複合的なもの、境界領域に属するものが多数含まれると予想される。また、本校には不登校経験者が6割以上在籍する。彼らの中には障害そのもの

による場合に加え、二次的な不適応に起因するものも相当数存在すると考える。さらに本人自身や保護者によっては障害に対する認識に誤解などがあることで二次的な問題を抱える場合もあると考える。一方、障害に対する学校の対応に過度の期待や依存を生じる場合もあるであろう。そこで、本人、保護者、学校が障害や発達上の困難さに対する認識や支援の目的や手立てを共通理解するための組織的、合理的なメソッドを開発する。

メソッド② 個別の指導計画・個別の教育支援計画の作成と効果的な活用

個別の指導計画と個別の教育支援計画に基づく総合的な支援を行う。指導計画には教育課程上の工夫・改善がなされるようにする。

メソッド③ 授業方法・形態の改善

全校的な共通理解のもと、発達上の困難さを抱える生徒を対象とした個別対応のできるピックアップ授業を展開し、個々の能力・才能を伸ばすための指導を研究開発する。また、学習における個別の困難さに対してタブレットPCなどを活用する。さらに学校全体として授業改善を目標としてUDの視点から研究授業を行う。

メソッド④ 多部制普通科高等学校における組織運営上の課題の明確化

メソッド①～③をPDCAサイクルに則って実践研究することで高等学校における特別支援教育を推進する上での課題を明確化し、改善策を提示する。

(3) 教育課程の特例

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
領域：自立活動 「社会技術基礎」 ①自立活動・キャリア ②学びの基礎 ③オーダーメイド学習	① 主としてソーシャルスキルトレーニング ② ICT(タブレット等)を活用し、個別の学びの困難さを緩和、克服し、生涯を通じて自ら学ぶ基礎力を養成 ③教科学習に関して個別の障害に応じた補充指導	1時間 (=45分) 35時間で1単位

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

授業研究会（6月～）を計5回実施し、授業参観の参加を募り、授業後にそれぞれについて授業研究会を丹念に行った。また、研究だよりにおいて授業研究会で話し合われた内容、各先生方の工夫などについて紹介をした。校内授業研究グループ“CUBE”を立ち上げた。“CUBE”の班は5、6人で教科が複数種類含まれるように編成したが、授業研究意識の向上の第一歩とはなったが、時間の確保が難しく、活発な班活動はまだまだ行えていない状況である。

(5) 研究成果の評価方法

- ①生徒の学習評価（自立活動の6区分26項目に基づいた観点別評価）
- ②教員への成果報告（研究だより・担任/部への報告と課題の共有・校内研究委員会にて経過報告）
- ③運営委員会（外部委員への報告と助言をいただく機会）

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容 * 前述の(3) 教育課程の特例の内容を実施。

(2) 全課程の修了認定の要件

35 時間の出席時数毎に 1 単位を認定し、卒業要件の単位数として加算される。

(3) 研究の経過

	実施内容等
第 1 年次	<p>自立活動領域授業「社会技術基礎」</p> <p>①自立活動・キャリア [主としてソーシャルスキルトレーニング]</p> <ul style="list-style-type: none">・設定場面におけるコミュニケーショントレーニング・将来の自立に係るコミュニケーションの大切さ <p>②学びの基礎 [ICT(タブレット等)を活用し、個別の学びの困難さを緩和、克服し、生涯を通じて自ら学ぶ基礎力を養成]</p> <ul style="list-style-type: none">・タブレットを利用して、文書や画像の個別作成(学校紹介) <p>③オーダーメイド学習 [教科学習に関して個別の障害に応じた補充指導]</p> <ul style="list-style-type: none">・授業の進度や定期考査に合わせた個別学習・苦手とする教科、課題への個別のチャレンジ支援・英検など資格試験受験の個別支援・得意とする教科、課題、進路希望に合わせた個別支援

(4) 評価に関する取組

	評価方法等
第 1 年次	自立活動6区分26項目を評価の観点とし、観点別評価を行った。 観点別評価の合計点を総合点とし、10段階・5段階の評価を行った。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

①生徒への効果

昨年度入学時から、本年度前期まではほぼ不登校状態にあった生徒 A (3 部：夜間部生) が夏休みの面談で自ら参加の意志を示し、自分の授業時間を決めることで、本授業について欠席はあるものの出席時間が増えた。さらに週 1 回ではあるが、本授業後に「科学と人間生活」の授業に出席することがあった。また、彼は担任に厚い信頼を寄せており、担任に本授業内容を報告し、励ましを受けることで、学習意欲が向上し、個別課題にも自主的に熱心に取り組んだ。

個別対応をすることで、授業、学校生活において本人が困難さを感じていることや進路についての希望や不安を率直に語る姿が本授業であらわれ、担当者がその生徒にきちんと向き合い、担任などその生徒に関わる教員が情報を共有することで、本授業の効果が向上したこともある。学力や人間性、人間関係、コミュニケーションの力についてはまだ効果として明文化するには時間が不十分であると考えているが、本授業の出席時間数の多い生徒については自分たちが企画、立案したことが実現したり、個別課題を主体的に選び、取り組み、理解につながったりすることで、定期考査や授業に臨む姿勢に積極性が増した。

②教員への効果

若い教職員が多いこと、また、特別支援教育の経験のない教職員が多い中、職員研修会などで研究の意義と概要を説明した。発達障害等の対象者をチェックシートにて抽出した。部会(学年会のようなもの)で理解を得ながら、協力を求めていくことで研究参加生徒の担任をはじめとして理解が深まり、「社会技

術基礎」(＝自立活動の授業名)に興味、関心を持つ教職員が増えていった。また節目ごとに社会技術基礎の授業内容や生徒の様子、授業研究会で話し合われたことなどを「研究だより」として発行した。次年度には運営指導委員である神戸大学大学院教授鳥居深雪氏による職員研修会を持ち、さらに高等学校における特別支援教育について理解を深めたい。

一斉授業の改善については、運営指導委員である兵庫教育大学大学院准教授八乙女利恵氏によるUDを用いた授業に関する職員研修会や授業研究会(国語・社会・数学・理科・英語)の実施を通じて、授業改善の意識を高めることをねらった。また校内授業研究グループ“CUBE”を立ち上げたことで、自主研修の意識の向上が図られつつある。

教員間の連携にあたっては、管理職の強い後押しと校内研究委員の理解と協力を得られたことで、各部会や教育課程委員会などでスムーズな進行が可能となった。

③その他の効果

(保護者) これまでの生育暦の中で心配や不安を抱えてきた参加生徒の保護者には好意的に受け止められ、積極的に参加の同意が得られた。また、授業通信を発行し、生徒の学んでいる事柄やその意義について伝えることで、理解が得られ、次年度の参加についても協力を得られた場合があった。しかし、中には“特別支援教育”＝“知的障害教育”のようにとらえた保護者もあり、本校に少なからず在籍する知的障害の可能性のある生徒、保護者にとっては研究対象とならないので残念であったようである。

(他の生徒) 本校は全ての授業が自由登録制であるため、一般的な「通級指導」とは異なる。したがって、参加生徒の周辺(友人など)以外にはこのような授業があることが情報としてほとんど伝わっていない状況である。

(その他(地域の理解等)) 先述したように、地域の中学校などにも“特別支援教育”＝“知的障害教育”と伝わった場合もあり、高等学校の卒業資格が得られ、しかも“特別支援学校”と同様の教育も受けられると過剰な期待を持たれたこともあった。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

本年度については研究1年目ということ、特別支援教育について知見のない教員が多いこと、担当者が本研究以外の校務(分掌、教科授業など)を担うため、研究に必要な時間を十分にとることが困難であった。また、自立活動支援員には、多大な貢献をしていただいたが、常勤職員でないため、勤務時間の問題、多部制、単位制普通科高校である本校独特のシステムを理解してもらうことの難しさなどの課題があった。

「個別の指導計画」と「個別の教育支援計画」作成には綿密なアセスメントと本人、保護者の同意が必要である。面談や関係諸機関との調整など多大な労力と時間を要することもある。今後、誰が、どのような校務分掌において作成、運用していくのかについての課題は大きい。また、効果的な一貫した指導・支援には中学校からの引き継ぎの推進は不可欠である。

研究当初から大きな課題である「評価」方法、特に表記については検討を重ねてきたが、特別支援学校のように文章表記の評価は高等学校にはなじみにくいと考え、自立活動6区分26項目を観点別評価の観点とみなして、高等学校の他の教科と同様、数値化する方向ですすめてきた。結果、今年度35時間の授業出席時数を満たし、1単位を認定される生徒について自立活動6区分26項目を評価の観点とし、観点別評価を行った。各観点別に3点、2点、1点の評価を行い、合計点を総合点とし、10段階・5段階の評価を行った。

研究2年目に向かうにあたり、さらに授業内容、教育課程の選定を慎重に行い、参加生徒のニーズを満たしつつ、担当者のねらう人間関係やコミュニケーションの課題についての成果をあげていきたい。加えて、一斉授業の改善のためには、校内研究グループ“CUBE”の有効活用をはじめとして、各教職員が切磋

琢磨して授業実践を積み上げられるよう、提案をしていきたい。

6 第2年次(H27)・第3年次(H28)の研究計画

第2年次	<p>教育課程の特例に関わる実践及び一斉授業の工夫・改善に関わる1年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員研修会（講演会・個別指導計画など作成） ・授業公開と研究会研究報告会（公開授業研究会） ・UD（ユニバーサルデザイン）を用いた授業実践 ・個別の指導計画と個別の教育支援計画の評価と検討 ・前年度使用のチェックシートをもとに新入生全員の実態把握 ・外部専門機関の活用 ・教育課程に関わる課題の整理と検討 ・報告書の作成
第3年次	<p>教育課程の特例に係る実践を検証し、研究成果と課題を総括する1年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員研修会（講演会を含む） ・研究発表会 ・支援対象者について個別の指導計画の最終実施・評価・検討 ・外部専門機関の活用 ・教育課程に関わる課題の解決を目標とした最終検討 ・全研究の総括と最終報告書の作成

7 第2年次(H27)・第3年次(H28)の評価に関する取組

	評価方法等
第2年次	<p>外部専門機関も含む個別の支援計画と個別の教育指導計画の評価と検討</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象生徒・保護者に対する質問紙、聞き取りなどによる調査 ・対象授業・生徒の学力調査 ・公開授業研究会における授業効果についての評価と分析
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・上記についての最終評価と総括 ・研究発表会の開催による評価